

自由主義史観という妖怪

広島部落解放研究所

青木秀男

こんにちは、青木です。今日は、「自由主義史観という妖怪」ということで、自由主義史観の歴史認識について、思うまま述べてみたいと思います。よろしくお願ひします。

皆さんもご存じのように、昨今の政治状況、また教育をめぐる状況には厳しいものがあります。政治が総保守化したとも言われています。ガイドラインの問題であるとか、安保条約の問題であるとか、盗聴法の問題であるとか、いろいろ議論されています。また自民党と自由党、それに公明党と民主党まで加わって、憲法調査会なるものを作り、それを機能させて、戦争放棄を詠ったいまの平和憲法を見直そうという動きも出ています。私も、これらの政治の動きを憂えている国民の一人であります。

広島県内の教育現場で、今何が進行しているのかについては、私などより先生がたの方が、よくご存じのこと

だと思えます。福山のある教師が国会で、広島県では子どもが荒れている、その原因は同和教育にあるのだというようなことを話したとか。どうしてそんな嘘をつくのでしょうか。また、広島県の教育長が、学習指導要領に則るとして、卒業式に「君が代」を歌い「日の丸」を掲げるよう高校長に通達し強制して、高校長を死にまで追いつめ、反対した教員を次つぎ処分するという、暴力的な思想統制を行ないました。彼らは、「君が代・日の丸」を子どもに強制して、教育反動化の梃子にしようとしているようです。恐ろしい話です。広島県は同和教育運動が頑張っているということで、全国の保守派から攻撃的にされています。もちろん、こうした攻撃に、同和教育運動が負けるなどとは思いませんが。

さて、このような日本の政治状況の中で、今日のテーマである自由主義史観が、先導的な役割を果たしていま

す。その影響が、政治や思想の保守化に拍車をかけています。自由主義史観は、今、現代日本の保守派の拠り所の一つとなっています。私は、日頃、政治に少々関心があるものですから、自由主義史観についても、本を読んだり、テレビを見たりする機会がありました。ごく最近のその人たちの動向については、ちょっと疎いのですが、それにしても、この自由主義史観が一定浸透している今日の政治状況を、私は、不愉快に思っています。彼らは、これまで、精力的に出版や講演などを行なってきました。しかし、この二三年、彼らの活動がやや落ちてきているという印象もしています。ただ一人気を吐いているのが、小林よしのりという人くらいなものでしょうか。広島でも、少し前までは、大きな本屋には、彼の漫画本のコーナーがあったりしました。しかしそれ以外では、自由主義史観の人たちの考えには、かりに中身があればの話ですけれども、最近は見るべき展開がないような気がしません。ところがです。そういう彼らの動向とは反対に、自由主義史観を名乗ったり、それに公然と賛同する人たちの方は、むしろ増えているような気がするのです。例えば、教育の場面や行政の場面で、そのような人たちの考えや、周辺に漂う扇情的というか、非合理的なムードが強まっているように思うのです。より良き社会をつくる

うと頑張るさまざまな社会運動を妨げる形で、そのような考えが浸透している。私は、そう感じています。皆さんはどうでしょうか。

ということ、自由主義史観とはどんな考えをいうのか、また、それはどう評価したらいいのかについて、話してみたいと思います。実のところ、私は、自由主義史観という考えに、特段、注目に値するような中身があるとは思っていません。しかし、それでも話の順序として、初めに自由主義史観について若干の要約をしておかなければなりません。皆さんにはすでにご存じのことかもしれませんが、まあ、少しお聞きください。

自由主義史観という考えが世に登場してきた経緯は、次のようなものでした。まず一九九五年に、東京大学の教育学部の教授である藤岡信勝という人が音頭をとって、「自由主義史観研究会」というのが作られました。そして藤岡さんが、あちこちの雑誌や本にその考えを書きまくりました。その代表的なものに、『汚辱の現代史』とか『自虐史観の病理』といった本があります。一九九六年、「自由主義史観研究会」の影響のもとに、「新しい歴史教科書をつくる会」というのが作られました。そしてこの「つくる会」から、『教科書が教えない歴史』と

いう本が出されました。たしかこの本は、今、四巻目まで出ていると思います。私も、それらを読みました。このシリーズ本は、現場の教師を含むこれの賛同者が、短い文章を寄せて編集したものであります。また先の「新しい歴史教科書をつくる会」には、藤岡さんや小林さんの他、西尾幹二、林真理子、深田祐介、山本夏彦といった著名人が呼びかけ人として、また賛同者には財界人や学者や評論家が名を連ねています。この賛同者の数も、いつときの急増期を過ぎて、現在は頭打ちの状態だと聞いています。

自由主義史観の人たちは、とくに明治以降の日本の近現代史に拘わって、これまでの近現代史の常識を転倒し、書き直さなければならぬと主張してきました。ところが最近では、たんなる近現代史の読み直しということから一歩踏み込んで、「自主憲法」なるものの制定を求めるといふように、具体的な政治的要求を掲げて運動するようになっていきます。先ほど言いました「憲法調査会」設立への動きと歩を一にして、積極的に政治行動をとるといふ段階に入ったわけですね。

このような経緯を経て、自由主義史観の人たちが登場してきたわけですが、では、彼らが言う日本の近現代史の見直しとは、具体的にどんなことをいうのでしょうか。

私は、藤岡さんの本を中心に、この人たちの本を一四〇五冊読みました。しかし、全体の読後感で言いますと、まあ、面白くないの一語に尽きます。印象だけを言っても仕方ないのですが、『教科書が教えない歴史』も退屈でした。で、そのことはともかく、この人たちのいう近現代史の見直しとはどんなものでしょうか。藤岡さんの考えを中心に、私が読んだ範囲で要約してみたいと思います。

まず、藤岡さんたちが一番言いたいことは、戦後、学校で教えてきた日本の近現代史の中身といえは、それは暗黒・自虐・謝罪外交の歴史観でしかなかった、ということでもあります。日本の子どもたちは、学校の歴史教育を通して、日本人である、日本民族の一員であるという誇りをもてない、それどころか、日本の戦争が悪かった、侵略が悪かったという具合に、自分の国の近現代の過去を否定し、アメリカやロシアやアジアの国々にひたすら詫び、媚びる、そのような歴史しか教えてこなかった、と云うのです。そうではなくて、歴史教育というものは、自分の国や民族に本当に誇りがもてるものでなければならぬ。そのためには、国益つまり国家の利益というものを最優先にみるような、そういう歴史教育でなければ

ならない。こう言うのです。これが、藤岡さんたちが一番言いたいことのようにです。これまでの近現代史は自虐史観であったということ、国益を最重視する歴史観をつくらなければならぬということ。自由主義史観の歴史観は、この二点に尽きるといっていいと思います。しかし、このような論法がいかにおかしいか、話を具体的に進めましょう。

私は、一九四三年の生まれです。父親は戦死です。戦争が終わった年は二歳ですから、父親の顔も覚えていません。そういう世代です。ですから、私が学校で受けた教育とは、丸ごと戦後のものであります。ところが藤岡さんたちは、私が受けた歴史教育をすべて否定するので。戦後の歴史教育は嘘だった、と。これは、私にとって不愉快な話です。私は、学校教育で学んだ歴史認識に誇りをもってきました。

『教科書が教えない歴史』という本は、短い物語を集めたスタイルで書かれています。その物語は、昔、こんなにすばらしい日本人がいました、という論調で延々と続いています。文体自体は、平易で読みやすい形になっています。しかし、書かれている中身には、私は、おおいに不満なのです。その例をいくつか挙げてみましょう。例えば、戦前、治安維持法というのがありました。藤

岡さんたちは、それは、国内のロシア勢力から祖国を守るための正当な法律だったと言うのです。しかし私は、学校で教わったというだけでなく、辛い体験をもつ人の話を直接聞いて、治安維持法という法律が当時の国民の思想を弾圧する、それは過酷なものだったということを知っています。当時、日本の戦争政策を批判し、それと闘ったあらゆる立場の良心の人たちを捕まえて、投獄していったのが、治安維持法であります。国内のロシア勢力から祖国を守るためなどというのは、当時の国内の矛盾を外国のせいにする無責任な理屈でしかありません。

藤岡さんたちは、こうも言います。日中戦争は、中国の排日政策、侮日政策、つまり日本を侮辱する政策が原因で起こった、というのです。これも、間違いです。日中戦争とは、日本軍国主義の植民地戦争そのものだったからであります。それは、被害者を加害者と言いくるめる、強盗の居直りにも等しい理屈であります。また、藤岡さんたちは、こう言います。日本のアジア「進出」は、アジアの国々の戦後の独立におおいに貢献した、というのです。これも、間違いです。アジアの国々の独立は、アジアの民衆の闘いの賜であって、日本はアメリカやイギリスやオランダから植民地を奪い取ったにすぎません。アジアの国々にとって、日本は、新たな植民地主義

者でしかなかったのであって、これと闘うことによってこそ、彼らの戦後の独立への途が拓けたのであります。最後に、藤岡さんたちは、軍隊慰安婦や南京大虐殺などはなかった、でっち上げだとさえ言うのです。そして、それらの出来事について立証済みの膨大な証言や記録を、無かったことにしていくのです。

このように、藤岡さんたちは、日本の近現代史が自国民やアジアの人たちを苦しめた戦争と侵略の連続であったという、基本的な事実を否定していきます。そこにあるのは、自虐史観をつくり替えたいという彼らの情動的な願望だけであって、学問的に合意され、自明とされている事柄は、まったく無視されています。私は、学校教育で受けた歴史観、つまり戦争と侵略の歴史を否定し、そのような歴史を繰り返してはならないという立場から近現代史を見ることは、戦後民主主義の出発点だと思っています。そういう立場を、藤岡さんたちは否定するわけです。

ただ、冒頭で、自由主義史観は、現代日本の保守派の拠り所の一つとなっていると言いましたが、このような考え自体は、なにも自由主義史観が初めてではありません。よく似た考えは、戦後、形を変えていろいろ現れています。例えば林房雄という人は『大東亜戦争肯定論』

という本を書いています。これは、一九六三年に書かれたもので、私が大学に入った次の年ですから、よく覚えていました。林房雄は、その本の中で、藤岡さんたちが言っているようなことを書いています。最近、読み返してみました。それは上下二巻からなり、中央公論社から出ています。その本の中で、林房雄は、日本の近現代にはファシズムなどというものはなかった。日本がアジアで行なった戦争は、アジアの人たちにとって解放戦争であった、という主張をしています。他方の藤岡さんも、林房雄が言ったこととほとんど同じことを言っています。日本が朝鮮半島を「併合」したことは、確かに賢明なやり方ではなかった。しかし当時、朝鮮半島の背後にはロシアという強大な敵がいた。だから日本は、自国を守るために朝鮮半島を「併合」せざるをえなかった、というようなことです。

このような歴史観について、私は、二つのことを指摘したいと思います。一つは、歴史認識が貧困だということとあります。これについては、後で詳しく検討したいと思います。もう一つは、その歴史認識の貧困の背後で、過酷な歴史の中に投げ出された民衆の一人ひとりが、どんな思いで生きかつ死んでいったのかということにつ

ての想像力が、これまた貧困だということであります。例えばアジアの人たちにとって、あの五四年前の戦争とは、どんなものだったのでしょうか。それは、私のささやかな見聞からしても、明らかなことです。アジアの人たちの心の中には、五四年前の日本の侵略が昨日の出来事として生きている、そういうことでもあります。

私の具体的な体験で、お話ししましょう。私、今年、フィリピンに行ってきました。昨年の一二月の終わりに、広島でアジアの女性問題に関するシンポジウムがあって、そこに、フィリピンから元軍隊慰安婦の女性が一人参加されました。わたし、そのとき少しお手伝いをしたものですから、そのついで、この度、フィリピンにその女性を訪ねていったのです。その時、彼女の家に、一五人の元慰安婦の女性が集まってくれました。一番若い方で七〇代初め、一番年上の方で九〇前だったと思います。ご存じの方もおられると思いますが、彼女たちは、今、日本政府を相手取って訴訟を起こしています。日本政府は、私たちの人間の尊厳を奪った責任を謝罪せよ、という訴えであります。そして、先日、東京地裁で判決があつて、彼女たちが負けました。その記事が新聞に大きく載りましたが、集まってくれた女性たちは、その時東京で判決を受けた人たちだったのです。一人の女性が、こう話し

てくれました。日本軍がフィリピンを占領した時、ある村で日本の兵隊に拉致されました。そして夜は、軍隊内の小屋に住まわされて、毎夜一〇人から二〇人の兵隊の相手をさせられました。昼は、土木工事の強制労働に駆り出されました。猛暑の中で水も与えられず、鞭で追われて酷使されました、と。今ここで、私その女性の地獄のような体験を代弁することなど、とてもできません。その女性は、戦後、慰安婦の体験を夫にもわが子にも話せずにきました。そして、初めてわが子にうち明けたのが、四年前のことでした。その時、子どもが励ましてくれました。それはお母さんのせいじゃない、戦争のせいだ。だからお母さんが人間の尊厳を取り戻したいと思うなら、名乗り出て、日本の政府に抗議したらいい、と。すばらしい子どもさんではないですか。その後、彼女は夫にもうち明けて、励まされて、ようやく何十年もの胸に秘めてきた屈辱の体験を周りの人に語り始めました。ちょうどその頃、別の女性がテレビに出て、昔の慰安婦の体験を話したのだそうです。その人はもう亡くなったようですが。それを見て、私も、私もという具合に、元慰安婦の女性たちが次つぎに名乗り出ていきました。そして今、女性たちは自分たちの組織を作って、日本政府に抗議をするところまでできたのです。女性たちは、毎月、

マニラの日本大使館へ抗議に出かけて行くそうです。

もう一人の女性は、こう語ってくれました。慰安婦をさせられて、一九四五年にマッカーサーが戻って来て、日本軍が出ていきました。その時、当然、その女性は奴隷のような拘束の立場から解放されるはずでした。ところが、彼女、日本兵の慰安婦だったことをアメリカ兵に疑われ、おまえは日本軍のスパイだった、協力者だったと言われて、捕まったというのです。その時、幸運にもその女性の村の村長さんが、いや、この子はスパイなんかじゃないと熱心に釈明してくれて、彼女はアメリカ軍を釈放されました。ところが、今度は、女性を助けてくれた村長自身が日本軍のスパイだったと嫌われて捕まり、絞首刑になってしまったというのです。女性は、村長さんは私の命を助けてくれた。今生きていますと自体、あの世にいる村長さんに申しわけなくて仕方がない。そういう気持ちで今も苦しんでいる、と言うのです。女性たちの話は、聞くも辛いものでした。涙、涙でした。でも、そのような貴重な勉強ができたことは、幸運なことでした。

話が少し逸れましたが、私が言いたいことは、彼女ら一人ひとりの中に、五四年前の屈辱の体験が、ほんの昨

日の出来事のように生きている、ということなのです。私が代弁するなどできないことですが、何かそういう、戦争とか侵略とかいう言葉の問題ではなくて、アジアの人たちが現実苦しんでいる心の傷というか、恨みというか、怒りというか……。いかに限りがあるうとも、このような想像力や感性、それをもたない人には、そもそも歴史認識もへたつくれもないと思うのです。これは、歴史認識の最低条件だと思うのです。だからこそ、私は、藤岡さんたちの主張がすごく不愉快に思うのです。ただ、ここで、不愉快という気持ちを強調していても仕方ありません。その気持ちの中身をこそ、きちんと話さなければならぬと思います。つまり自由主義史観の人たちの歴史認識は、どこがどんなふうにおかしいのか、ということでもあります。次も、藤岡さんたちの本の中からいくつかの例を取り出す形で、話そうと思います。

『教科書が教えない歴史』の一冊目に、関東大震災について述べたくだりがあります。その中で、その文章を書いた人は、こう言います。関東大震災の時に多くの朝鮮人が殺されましたが、その時の、横浜の鶴見という警察の署長さんの話です。その時の、鶴見署に、三〇〇人の朝鮮人が一、〇〇〇人の日本人の暴徒に追われて、助けを求

めて逃げ込みました。暴徒たちが凶器をもって、警察署を取り囲んで、朝鮮人を出せと詰め寄りました。その時、その署長さんが身を挺して暴徒の前に立ちはだかつて、ついに暴徒たちから三〇〇人の朝鮮人の命を救ったのです。皆さん、あの関東大震災でたくさんの朝鮮人が殺されたという状況の中で、なんと、こんなにすばらしい日本人がいたのです。と、まあ、このような「美談」を書いているのです。

しかし、私は、この文章にすぐく腹が立ちました。横浜の鶴見署の署長が、朝鮮人の命を救ったという話が本当かどうか、私は知りません。しかし、かりにその話が本当だとしても、だからそれがどうしたというのでしょうか。警察署長が朝鮮人を助けたということ。それは、当たり前のことではないでしょうか。命が脅かされている人間を助けるのが、そもそも警察の仕事というものでしょう。この話の中で、そんなことよりはるかに大切なものは、棍棒やなたや鎌をもって朝鮮人を追い回して、警察を取り囲んで、朝鮮人を出せと詰め寄った暴徒の日本人の方なのです。普段は優しい近所のおじさんが、非常時には恐ろしい殺人鬼に豹変したという、日本人の朝鮮人に対する偏見と劣情というか、罪の深さというか、不気味さというか、そういうものこそ問題なのではないで

しょうか。つまり、この文章を書いた人のまやかしとは、個々の事実を歴史の出来事の全体に位置づけてそれを解釈するのでなく、自分の考えに都合のいい「些末な」事実だけを取り出して、それを強調して、自分の理屈を正当化する材料としていく、という論法にあるのです。つまり、関東大震災の混乱の中でも、こんなにすばらしい日本人がいたという形で、一、〇〇〇人の日本人暴徒がいたという事実、さらに関東大震災の混乱の中で六、〇〇〇人を越える朝鮮人が殺されたといったという事実の決定的な意味を無化していく、ということなのであります。

もう一つ、例を挙げましょう。これは、『教科書が教えない歴史』の四冊目に出てくるくだりであります。日本が朝鮮半島を「併合」した時、朝鮮半島に鉄道を引きました。また、産米増産計画を実施して、米の増産を達成しました。そして、これらの事業が、朝鮮半島の経済発展に貢献し、戦後の韓国の経済成長の土壌を作ったのです。と、そんな記述であります。この説明のまやかしも、同じであります。ここでは、日本による朝鮮半島の「併合」つまり侵略と植民地化という、話の前提となる事実が葬り去られています。ある歴史家などはこれとは正反対に、日本による五〇年間の植民地統治がなかったら、朝鮮半島はもっと早く近代化していただろ

うと書いています。そのことはともかく、なによりも、植民地政策とは、植民地のあらゆる自然や人間の資源を奪い尽くす政策のことをいいます。米の増産計画にしても、米騒動が起きるほどに米に逼迫していた当時の日本に、米を補給するための政策に他なりませんでした。このような事実を、どうして否定できるでしょうか。

もう一つ、例を挙げましょう。これも『教科書が教えない歴史』の四冊目に出てくる話であります。五四年前の戦争で、日本軍はマレーを占領したが、マレー人は一人も殺さなかった。日本軍がマレーで殺したのは、イギリス軍やそれに協力した中国人ゲリラだけであった、と。こういうくだりであります。これも、事実に戻して見ます。マレーとは今のマレーシアのことですが、当時、日本軍が多くのマレーシア人を共産ゲリラと決めつけて殺したという記録は、いっぱいあります。だいたい日本軍は、マレーシア人と中国人をどこで見分けることができただのでしょうか。また、共産ゲリラとそうでない人をどこで見分けることができたのでしょうか。見分けることなど、ほとんど不可能だったはずです。さらに言えば、シンガポールでも、日本軍による中国人の大量虐殺事件が起きています。このことも、戦後、シンガポール人による証言やドキュメント等で、詳細に明らかにされています。

ます。このように、自由主義史観の人たちが、日本軍がアジアで行なったあれこれの蛮行を無きことにしようとしても、それは無理というものです。

このように、自由主義史観の人たちは、日本の近現代史を擁護しようとして、あちこちでボロを出す結果になっています。藤岡さんは、司馬遼太郎の歴史観に準拠するということを言っています。たくさんの歴史小説を書いた、あの司馬遼太郎であります。彼は、一九一八年のシベリア出兵から後の歴史は、過ちの歴史だったと考えて、小説には一言も書かなかったそうです。ところが藤岡さんは、司馬遼太郎の歴史観に準拠すると言いながら、シベリア出兵以後の戦争についても、今例を挙げたように、あれこれと擁護しているのです。ですから、司馬遼太郎の歴史観をどう評価するかはともかくとして、藤岡さんは、明らかに司馬遼太郎からも逸脱しておりません。そして、彼の歴史認識の方法といえば、先に触れましたように、自分に都合のいい事実だけを抜き出して、それをひたすら強調するという、単純極まりないものでした。

歴史を科学的に認識しようとする時、因果分析ということを行ないません。一つの事実には原因がある。その原

因にはさらに別の原因がある・・という形で、結果から原因へ、原因へと遡って行って、その過程で事実を集積して、出来事の全体像を浮き彫りにするというのが、歴史認識の手続きであります。つまり、Aという事実とBという事実がどう関連しているのか。この分析を積み重ねながら、歴史の真実、つまり隠れた部分を明らかにしていくという方法であります。しかし、藤岡さんたちの方法は、そうしたものは無縁のものでしかありません。彼らの方法というのは、他人から何を批判されても、自分の主張をひたすら繰り返すだけというものであります。私、藤岡さんの本を五、六冊読みましたが、それらが面白くなかった理由は、一つは、このような歴史の論証、つまり出来事の全体過程への関連づけというものを欠いていることにあると思います。つまり彼の本からは、歴史を読み解いていく時の、あのわくわくするような知的興奮が感じられないのです。

これを、別の形で言いますと、次のようになります。つまり、科学的認識の成立のためには、二つの要件が必要となる、ということでもあります。それらは、科学的真理の発見の基本要件となるものであります。一つは、「実証的」ということであります。つまり歴史についての言説が、確かな事実によって裏付けられているということ

であります。もう一つは、事実の解釈や、事実と事実の関連、これを因果関連といいますが、その関連が「論理的」に矛盾なく説明されている、ということでもあります。つまり説明のつじつまが合っているということでもあります。このように、事実裏付けられているということと、それら事実群の説明が論理的であるということ。

これらが、近代科学の基本要件となるものであります。これはもちろん、歴史学だけでなく、私が研究している社会学の分野でも、同じことであります。現実の歴史や社会には、自分の価値観にとって不都合で、認めがたい事実がたくさんあります。しかし、歴史や社会を研究するという場合、そのような事実をも、自分の認識の枠組みに照らして、整合的に説明しきらなくてはなりません。ところが、藤岡さんたちの場合は、歴史に対する願望というか、思いというか、そのような目的がまず先にあって、それが歴史認識の中身を支配してしまっているのです。ですから、何を批判されても、答えは鸚鵡返しとなります。せいぜい、都合のいい新たな事実を加えていくだけのことであります。これを、歴史の目的論的な説明といえます。つまり、藤岡さんたちの歴史認識は、宗教や信仰と同じ構造になっているのです。反論の余地がないということなのです。科学論の世界ではこのこと

を、反証可能性がない、と言います。特定の歴史認識について、いやそうではない、こうなのだ、という反証が保障されないような認識はだめだ、ということでありませう。

これまで、歴史学者が日本の近現代史について、膨大な研究を行ってきました。その中には、すでに歴史家のあいだで、これは科学的に疑いような真実であるとして、合意された事実もたくさんあります。私たちは、戦後の歴史教育で、そのような立証と反証の過程をくぐり抜けた科学的認識の成果の一部を教えてもらってきたわけです。確かに、いったん真実であるとされた事実が、後日、新たな事実や解釈によって反証されるということもあります。事実、そのようないくつかの例を、私は知っています。ところが、歴史の細かい部分の解釈をめぐってならいざ知らず、歴史認識の基本的な大枠、例えば、五四年前の戦争は日本がアジアを植民地にするための侵略戦争だったというような認識、これが間違いだっただんどうという反証に、私はお目にかかったことがありません。しかし、そのような大前提、しかもそれをこそ日本人が率直に受け止めなければならぬような基本的事実を、ことごとく論証なしに拒絶する。これが、藤岡さんたちの歴史に対する態度であります。現に「新しい歴史教科

書をつくる会」には、歴史学者が一人も加わっていないそうです。そこまで科学者としての資質を貶めたくないということでしょうか。私は、歴史学者の考えがいつも正しいなどとは思っておりません。歴史学者にも、いろんな人がおります。保守的な価値観をもった人も少なくありません。しかし、個々の考えに反対であれ賛成であれ、歴史学者が全体として、少なくとも学者の良心というものをなお堅持しているということ。これは、嬉しいことではあります。

次に、自由主義という言葉について、一言、触れたいと思います。先ほど、藤岡さんたちは、国益や民族の誇りを最大限に優先する歴史観を望んでいると言いました。彼らは、そのような立場を「自由主義」と自称しています。ところがそれは、とんでもない形容矛盾であります。私には、藤岡さんたちが、国家主義とか民族主義というこわ面での印象を和らげるために、自由主義という言葉を用いているとは思えません。藤岡さんたちは、自分たちの歴史認識は偏ったイデオロギーから自由であることを期す、と言っています。しかし、国益を最大限に重視するという歴史観そのものが、一つの偏狭なイデオロギーであります。そのことを考えると、彼らの、中立で

あるという主張には、ただ白けるばかりであります。

ご存じのように、そもそも自由主義とは、近代市民社会をつくり、それを支えてきた基本理念の一つであります。個人の独立不可侵の人格に立脚して、社会を形成すること。これが、自由主義というものの真正な意味であります。そして、人間の人格の利害に照らして、国家や民族などの集団、それらを共同幻想といいますが、それらの集団の政策を評価し、また批判していくこと。ここにこそ、自由主義の真骨頂があるわけです。このような自由主義の理解は、日本でも世界でも、常識に属する合意事項であるはずで、ところが藤岡さんたちは、そのような合意を無視して、自由主義という言葉を、あろうことか国家や民族の利益を優先させるとして、まったく正反対の意味で用いているのです。ですから、事情を知らない人には、話がややこしくなるわけです。これは、言葉とか概念というものの使い方を知らない類のものであります。なぜなら、言葉や概念とは、それが指示する事柄の意味を共有する文化に属する人たちに、その意味を伝達するための用具だからであります。

そしてもう一つ、自由ということについて触れておきたいことがあります。それは、他人の自由というものが、自分の自由の本質的な構成要件である、ということであ

ります。平たい言葉で言いますと、自分の隣りで生きている人間が、もし自由を奪われているとしたら、それは私もまた自由でない、ということでもあります。つまり、私の自由は隣人の自由と同じのもの、という同一性の要件であります。このように、自由とは、その本質において普遍的な理念であります。例えば、先ほど、アジアの人たちは今なお戦争の傷を抱えて生きていると言いました。ここでの脈絡で言うならば、ではアジアの人たちがその傷を抱え、どのような不安や怒りの中で生きてきたのだろうか、そのことへの想像力なり共感なりを抜きにして、私たち日本人の自由はありえない、ということでもあります。このことは、同和教育の中でもよく言われてきたことでもあります。つまり、踏まれた者の傷みを分かるとか、差別問題を自分の問題として受け止めよ、という言い方であります。もちろん他人の傷みは、どこまでいっても完全に分かるものではありません。分からないものは分からないです。しかしにもかかわらず、人間には想像力というものがあります。みずからの感性や追体験に照らして、他人の傷みを分かるうとすれば、分かる部分がかならずあるはずで、そのかぎり人間は他人とともに生きている、つまり「ともに」自由な存在である、ということになります。しかし、自由主義史観の人たち

に、このような想像力があるといえるでしょうか。私には、とてもそのようなとは思えません。なぜなら、もしそのような想像力があるというのなら、どうして藤岡さんたちは、日本の戦争や侵略を免罪したり、アジアの人たちの傷を逆撫するようなことばかり吹聴するのでしょうか。藤岡さんたちの「自由主義」とは、自由の真正な意味とは関係のないものであります。

先ほど、藤岡さんたちは、日本の近現代史の教育は自虐史観であった、外国に追従する歴史観であったと考えている、と言いました。近現代の戦争と侵略を恥ずべき歴史として否定するのではなく、あれこれ理屈をつけて肯定する人たちにとっては、そのような教育はたしかに自虐的と映ることでしょう。このように藤岡さんたちは、自虐ということを強調するわけですが、それならば、ドイツの場合はどうなるのでしょうか。ドイツは、かつてナチズムという大きな過ちを犯した国であります。私の友人で、最近、一年間のドイツ留学から帰ってきた人がいます。彼の話の聞いても、ドイツの学校では、ナチズムが恥ずべき歴史の過ちであったことを、子どもたちに徹底して教えているそうです。それがドイツの歴史教育の中心をなしている、と友人は言います。では、そうだ

としたら、ドイツ国民は、自虐史観に陥っているということになるのでしょうか。そんなことはありません。ドイツ国民は、そのような教育を当然のものと思っただけです。それは、戦後ドイツの国をあげての反省の態度をみれば、すぐ分かることであります。

このことと関連して、私は、戦争と侵略の歴史から悲しみを学ぶだけでなく、まさに同じ歴史の中で、藤岡さんたちとは正反対の意味での、日本人の誇りを学ぶことができると思っております。それは、ファシズムが吹き荒れる真只中で、そういう戦争と侵略の政策に抵抗して闘い、人間の尊厳と自由を抱きながら、傷つきかつ死んでいったたくさんの日本人が、戦前にもいたということであります。その人たちの闘いは、残念ながら、圧倒的なファシズムの嵐のなかで潰されていきました。とはいえ、ファシズムの嵐が過酷であればあるほど、そのような孤高の精神の日本人がいたという事実には、私たちは胸を張っていいのではないのでしょうか。そして、その人たちの思想は、日本の思想風土のなかに確かに刻まれていていると、私は思うのです。

例えば、先ほど出ました治安維持法です。治安維持法は、一九二五年に成立して、四四年に実質、廃案になっています。四四年といえ、アジア・太平洋戦争が始

まった後の時期であります。つまり、国内の「危険人物」はもう一掃されてしまって、治安維持法などほとんど必要なくなったような段階ということでしょうか。で、この治安維持法によって、およそ七万人が捕まったそうです。この人たちの中には、残酷な拷問を受けた人も少なくなかったことでしょう。ある団体の調査によれば、その内、六千人が起訴されたそうです。拷問や投獄で、あるいはそれらが原因で死んでいった人が何人いるのか、それはとても調べようがないそうです。まあ、有名な話で言えば、小林多喜二の事件とか横浜事件というのがありましたね。

ところで、これらの数字は、同時に、そのようなファシズムの嵐の真只中で、戦争と侵略の政策に反対して闘った人がそんなにたくさんいた、ということを示していることとなります。例えば、私が事件の当事者から直接話を聞いたものに、大阪商科大学事件というのがあります。一九三三年に、京都帝国大学で滝川事件というのがあって、軍部の圧力によって滝川教授がくびになりました。すると、その滝川教授を大阪商大の教授会が迎えようとしたわけです。それで、軍部は今度は、大阪商大を恫喝して、滝川教授を採用することは許さないとやったわけです。ところが、大阪商大の教授たちは、軍

部の圧力に抗議して、全員、辞表を出したわけです。それで、教授たちが特別警察高等課、つまり特高に逮捕されて、きびしい尋問と拷問を受けることになりました。

この拷問で、次つぎと傷つき、病み、そして何人かが死んでいきました。私を知る先生は、もう亡くなった方ですが、その時の尋問や拷問などの体験を詳しく話してくれました。彼は、体を張って弾圧に耐えたということです。それほどに、自由に飢えていたということです。もちろん、彼は、共産主義者でもありませんでした。

もう一つ、一九三〇年代に、日本労働組合全国協議会というのがありました。通称、全協と呼ばれていました。それは、労働組合の連合体でした。それが、労働運動を通してファシズムに対する反戦・反植民地の闘いを繰り上げたのです。そして、その闘いの先頭に立ったのが、当時日本に住んでいた朝鮮人労働者でした。朝鮮人労働者が闘い、そして日本人労働者が彼らとしっかり手を組みました。そういえば、五味川純平の『戦争と人間』の中に、獄中の同房で、拷問を受けた日本人と朝鮮人が励ましあうという感動的なシーンがありました。つまり、労働者階級の間には朝鮮人に対する偏見が強く、また労働運動自体が分断され、孤立させられていた時代に、このような、ファシズムと闘う労働運動が起こり、しかもそ

の真只中で、日本人と朝鮮人が固く団結していったのです。これも、感動的な話です。このような話は、他にもたくさんあったと思います。そしてまさしく、このような輝かしい闘いの歴史をこそ、私は誇っていると思うのです。藤岡さんたちは、今の憲法はアメリカによって押しつけられたものだと言います。しかし、私はそうは思いません。憲法ができた具体的な経緯はともかく、私が言いたいのは、次のことでもあります。つまり、戦後、平和憲法とか民主教育というものが、スムーズに国民の中に浸透していきました。それは、日本人が進駐軍に対して従順だったからとか、戦争と敗戦に絶望していたからということではありません。そうではなく、それらがスムーズに浸透していった土壌として、自由民権運動から大正デモクラシーを経て、ファシズムのもとでの反戦・反植民地の闘いへという、日本の近現代を通して綿々と引き継がれてきた、自由を求める人たちの闘いの歴史があった、ということでもあります。その意味で、私は、戦前と戦後はつながっていると思っています。私には、そのことをこそ誇りに思いたいのです。

次に、自由主義史観の考えに胎まれる「思想的な」意味について、もう少し敷衍したいと思います。藤岡さん

は、偶然にも、私と同じ年です。今年、五五歳か五六歳になるはずですが。彼は、本の中で、自分の経歴について触れています。藤岡さんは、六〇年安保の直後に北海道大学に入学して、日韓条約反対とか大学管理法案反対とかの学生運動に関わっていきました。そのような、大学に入ってから政治的な体験というのは、私とまったく重なります。同じ年齢ですから。藤岡さんは、大学時代、民青に入っていたそうです。民青というのは、民主青年同盟という、日本共産党の青年組織のことです。

そういえば、私の大学にも民青の人はたくさんいました。ところが、藤岡さんは、こう言います。ソ連が崩壊した。そして、湾岸戦争が起こった。私はこの二つの事件にショックを受けた。それで私は、民青から、つまり共産党に失望して、自由主義史観に転向したのだと、こう言うのです。皆さん、どう思いますか。私は、あまりに単純な「転向」話に、啞然とするばかりです。藤岡さんは、ソ連が崩壊したというのを、共産主義が負けたとでも理解したのでしょうか。湾岸戦争の方は、軍事大国というのは国益のためにどんな横暴でもやるものだから、日本も軍力をもたないと大変なことになるとも思ったのでしょうか。しかし、かりに藤岡さんがそう思ったとして、皆さん、これが思想の転向などといえる代物で

しようか。私の目には、そこには、時代の出来事に驚愕して慌てふためき、その時どきの支配的な政治の思潮の間を右往左往するだけの、あぶくのような人間像しか映らないのです。

私は、共産主義者ではありません。また、日本共産党のような考え方に賛成できない一人であります。そうだとしても、だからといって、ソ連が崩壊したから共産主義が資本主義に負けたなどというような単純な話ではすまないはずです。このような空虚な理屈自体、そもそも藤岡さんの共産主義が、当時のまじめ学生のファッションのような、まあ、その程度のものでしかなかったことを、みずから暴露しているようなものです。また同じく、藤岡さんのような人物をかつて抱えた共産党の思想や組織って、なんでしょうか。もっとも、私自身はべつに、意外とも思いませんが。ある人によれば、藤岡さんは、一九九四年に『授業づくりネットワーク』という雑誌に、こう書いているそうです。つまり、日本のアジア進出は、いかなる理由があろうとも正当化されるものではない、と。彼は、ここで、日本の大陸侵略を批判しているわけです。ところが、その二年後に、彼は、『現代教育科学』という雑誌に、こう書いているそうです。つまり、私は、日本軍がアジアに進出したことがアジアの国々の独立に

貢献したということは、初めから言っていることです、と。このような無邪気な態度の変節に呆れるというより、そもそもそれは、思想云々とは関係ない代物であります。つまり、浅薄というか、無知というか、とにかく形容のしようのないものであります。深層心理的には、私はそのようなものさえ感じてしまいます。東大の教授でもそんなものがあるんだなと、滑稽なくらいです。

藤岡さんの批判はさておくとして、今日、ここで、私が一番言いたいことは、次のことだったのです。先にも言いましたように、自由主義史観の歴史認識がかくかくに間違っていると批判しても、中身としてはなにも得るところはありません。それよりも大切なことは、そのような空疎な考えが、どうして今日の政治状況の中で一定の役割を担ってしまっているのか、という現実の方であります。自由主義史観の浸透というものを、誇張して語ることはできませんが、それでも浸透はしていています。そのことをどう受けめたらいいのか、という問題こそが、深刻だと思っております。

この点について、私はこう思います。確かに戦後の民主教育は、すばらしい教育だったと思います。世界に誇りうる教育だったと思います。私の思想の基本的な枠組

みは、この民主教育の中で作られました。そのことを、私も誇りに思っています。しかし同時に、私は、民主教育が胎んできたある弱さというものに気づくのです。それは何かと言うと、まさしく自由主義史観の考えが一定浸透していった政治状況自体に窺うことのできる、思想的な没主体性というものであります。つまり、世の中の支配的な考えや潮流やムードといったものに準拠していか、みずからの生き方を決めることができないような、大江健三郎の言葉で言うなら、「あいまいな」人間を、戦後民主主義はたくさん作ってきたのではないか、ということであります。藤岡さんは、その典型的な一人にすぎません。いや、もしかしたら、私自身さえそのようなあいまいさやもろさと無関係ではないのではないか、ということであります。ですから、藤岡さんの生き方は、他人ごとですまされないわけです。つまり、藤岡さんのような空虚な生き方には、戦後の人たちがすべてが主体的に受け止めなければならぬ問題を抱えている、ということとであります。その意味で、藤岡さんは判りやすい反面教師です。

もう一つ、藤岡さんが民青だったということについてはあります。藤岡さんは、ソ連の崩壊をきっかけに、自由主義史観に転向したのだと言います。ここで私は、そ

のような藤岡さんを抱えた日本共産党をことさら批判するつもりはありません。ただ、政治の思想や運動には、つねに落とし穴があると言いたいだけなのです。例えば共産党の人たちは、自分たちは労働者の味方、貧しい民衆の味方であるという正義感が強い人たちのようです。問題は、その正義感なのです。正義感が、即、間違いだとは言いません。それは、歴史変革のバネにもなります。

しかしだからといって、そこに、だから自分たちが間違えはうはずがない、などという傲慢な自己絶対化があったとしたら、それは危険きわまりないことであります。自分の立場の無謬正への信仰、それこそ紛れもなく、思想的な頹廃だからであります。正義感は、正当性の感覚を生み出します。つまり、「前衛」意識であります。そして、自分を批判する人間にただ敵愾心をもって、やたら「敵」とか「反動」とか「スパイ」と決めつけていきます。するとその先には、肅正や抹殺の論理しか待ちうけていません。このような思想の頹廃が、共産主義とか社会主義を名乗る人たちになかったと言いつけるでしょうか。労働者のため、民衆のためという正義感による組織なり運動なりが、いつの間にか肝心の労働者や民衆を抑圧する権力になりさがってしまう。そういう危険であります。換言すれば、「意図せざる」歴史の奸計とでもいいます。

うか。つまり、そんなはずではなかった、ということであります。ソ連の崩壊から私たちが学ばなければならぬのは、まさにこのような、主体の内に潜む頹廢の危険をつねに自覚しなければならぬということではないでしょうか。藤岡さんたちの自由主義史観をめぐる政治状況を主体的に受け止める時、最後は、このような厳しい問題にまで行き着いてしまいます。

もっとも大切なことは、時代の支配的な拘束の中で、みずからの信念に照らして、時には民衆からの孤立にさえ耐え、不安や恐怖に耐えて、自立して生きていくための内面的な根拠。これの模索というか、確立というか、そのような問題意識を抜きにしては、自由主義史観とその政治状況を本当に乗り越えることはできない。このことを、私は強調したいのです。ここでも、話を具体的に進めましょう。四年前、私たちは、広島市民を対象にアンケート調査を行いました。サンプル四〇〇ほどの小さな調査でした。その中の項目の一つで、私たちは、「あなたは五〇年前の戦争についてどう思いますか」という質問を入れました。ところが、その問への回答者の答えは、次のようなものでした。つまり「一部の軍人が悪かった」というのが四三・パーセント、「当時の世界情勢のな

かで仕方なかった」というのが二七・パーセント、「アジアの解放戦争だった」というのが三・パーセント、最後に「侵略戦争だった」というのが二七・パーセントというものでした。調査を行なった当時、ちょうど、日本の戦争責任をめぐるマスコミが盛んに議論していました。その時、日本軍がアジアに出たことが「進出」だったか「侵略」だったかということが、議論の焦点になっていました。そして、あれは「侵略戦争だった」というのが、戦争批判を代表する言説としてありました。とすると、そのような脈絡で、五〇年前の戦争はいかなる意味でも許されるものでないと答えた人は、三人に一人も満たなかったということになります。つまり、圧倒的に多くの日本人、しかも戦争のせいで原爆が落ちてさんざんな目にあつた広島市民ですが、どこかであの戦争を免罪しているということなのです。あれだけ酷い目にあつて、それでもあの戦争について自分の体験を裏切るような認識しかできていない。とすれば、広島島の平和教育って、なんだったのだろうということになります。

もう一つ、まったく場面を変えて、例を出します。ある県内の自治体で、同和問題に関する市民意識のアンケート調査が行なわれ、私もその手伝いをしました。一昨年のことです。その中に、「身元調査についてあなた

はどう思いますか」という質問がありました。その間で「おかしい」と答えた住民は、回答者の三六パーセントでした。この答えも、厳しく言えば、アンケートで「おかしい」と答えた人すべてが、実際の場面でもそう言い切れるかどうか、分らないところです。しかし、そこまで問わないにしても、同和問題についての住民意識の実態は、社会啓発に熱心なその自治体でさえ、こんなものであります。三六パーセントという数字を、大きいと見るか小さいと見るか、という問題はあります。しかし、人権意識がかなり浸透しているはずの自治体からすれば、この数字はまだまだ小さいと思います。つまり、ここで、五四年前の戦争と身元調査というまったく異なる事例を並べたのは、次のことを言いたいからです。つまり、困難な状況のなかで、本当にみずからの利害に懸けて生き方の決断が迫られた時に、どれほどの人が、その内面の価値や良心に照らして、生き方を自由に選択することができるだろうか、という疑念を出したからであります。そして、そのような主体性のない人間を戦後民主主義は作ってきた、ということをやったからであります。その点で、私は、戦後民主主義を厳しく評価しています。まさにそのような生き方にも、あいまいさや優柔不断こそが、自由主義史観のような考えが受け入

れられていってしまう、また、そのような考えに毅然と反対できない人間が作られていってしまう基盤となっている、と思うからであります。

この点に関連して、もう少し敷衍したいと思います。一九三〇年代から四〇年代のドイツで思想家として活躍した人に、エーリッヒ・フロムという人がいました。フロムは、『自由からの逃走』という有名な本を書いています。彼は、ユダヤ系の学者で、ゲシュタポに追われてアメリカに亡命した人であります。その彼が、本の中で、次のようなことを書いています。つまり、人間は、封建的な桎梏や束縛からみずから解放した。そして、神は死んだ。封建領主も死んだ。身分も死んだ。新たに生まれた社会で、人間は、みずからの主人公になった。つまり、みずからの生き方を自由に選択することのできる位置に立った。この人間がつくる社会こそ、近代市民社会である。ところが、悲しいかな、人間はみずからの生き方を自由に選択すべき位置に立った時、生き方をみずから選ぶことの不安と孤独に苛まれるようになった。そして、人間は、この世を生きる苦難のもと、みずからの内なる声に従って、生き方を選択していく勇氣を失った。かくして、人間は、せっかく手にした自由を、より

強く権威ある「超越者」に委ねるに至った。そして「超越者」に救いを求めることで、不安と孤独から免れることができる、と錯覚していった。・まさしくこれが、近代人の悲劇であると、こう書いています。フロムのこの話には、厳しい時代批判が込められています。つまりフロムは、ドイツでヒトラーが権力をとったのは、たんにヒトラーが弁舌がうまかったからでも、当時のドイツ経済が恐慌に陥っていたからだけでもない。ヒトラーが権力をとった本当の原因とは、当時没落しつつあった事業者や、貧しい労働者階級が、みずからの経済的困窮や社会的苦難に、みずからの闘いをもって挑むのではなく、それらの苦難を救ってくれる救世主を求めていったことの結果にすぎないと、こう批判したわけでありました。一九三〇年代のドイツと今の日本とは、状況がまったく違います。にもかかわらず、このフロムの時代批判は、まさに、先ほど言いましたような戦後民主主義に内在する人間のよろさというものを、見事に突いているといえないでしょうか。

このように、自由主義史観をめぐる政治状況は、人間の思想的な主体性という問題を提起している、ということとであります。人間の主体性ということは、同和教育で

も強調されていることであります。つまり差別問題を自分の胸で感じ、自分の頭で考えよ、というものであります。そこで、次に問題となるのは、ならば、人間は歴史に対していかに主体的であるべきか、主体的たりうるかという問題であります。さらにそれは、苦渋の近現代史から、私たちは何を学ぶべきか、いかに学ぶべきかという問題に続いていきます。マックス・ウエーバーという、これもドイツの学者ですが、彼は、人間はみずから作った歴史から逃げてはならない、ということを書いていきます。みずからの過去に向き合うことがどんなに辛かろうとも、それから逃げてはならない、というわけであります。彼はこれを、歴史に対する責任、と言っています。

同じことを、ドイツの元大統領であるヴァイツェッカーも言っています。つまり、罪がある者もない者も、年寄りも若者も、ドイツ国民は一人といえども、あの忌まわしいアウシュヴィッツの体験から逃れることはできない、というわけです。ジャン・ポール・サルトルという哲学者がいますが、彼ならばさしずめ、人間は歴史の状況に参加する、その状況にわれを投げ出すことによってのみ、人間は実存することができる、つまり自由な存在となることができるとも言ったでしょう。これら先人の言葉は、もう、その通りであります。私自身にしても、父

親は戦争で死にましたが、戦争には直接関わっていない戦後人間であります。しかしにもかかわらず、日本という国の今に生きる私もまた、五四年前の戦争の歴史から逃れることはできません。なぜなら、私の生き方の中で、五四年前の歴史の意味がたえず問われ続けているからであります。そのことが、いま・ここで生きる私の自由の中身だからであります。先人たちの言葉は、そのことを私に教えているのだと思います。

少し話が逸れますが、一つ、付け加えておきます。それは、日本政府の戦争責任に対する態度がいかにお粗末かということでもあります。日本政府の態度は、ドイツやアメリカと比べると、一目瞭然であります。例えばドイツでは、一九九四年に、民衆扇動罪という法律が制定されました。それはどういう法律かといえば、公けの場所でヒトラーを推賞したり擁護するような言動を行なった場合、その人は法律によって罰せられるということです。五年以下の禁錮、または罰金刑だそうです。確かに、法律で罰すればすむという問題ではありません。しかし、独裁政権でもないかぎり、どんな法律であれ、それが制定される背景には、国民の合意というものがありません。この点が大切なわけであります。さしずめ日本がドイツ

のような国であったなら、自由主義史観の人たちなど、とっくの昔に刑務所に入っていたことでしょう。

戦後補償の問題についても、同じことがいえます。ナチ時代のドイツで、たくさんユダヤ人が殺されました。そして、そのドイツ政府は、今、ナチによって被害を蒙った一人ひとりのユダヤ人に対して国として謝罪し、個人補償を行なっているのです。アメリカもそうであります。戦争中に、日系アメリカ人が、収容所に入れられました。戦後、ある大統領は、あの出来事はアメリカ史上最大の恥であると言っています。そして政府は、当時被害を受けた日系アメリカ人たちに名乗り出てくださいと呼びかけ、名乗り出た一人ひとりに国として謝罪し、個人補償を行なっているのです。しかも、呼びかけるだけでなく、さまざまな事情で名乗り出ることのできない日系アメリカ人を、調査までして探し出して、補償しているのです。これが、世界の常識というものです。

これに対して、日本の政府はどうでしょうか。日本政府は、例えば元軍隊慰安婦に対しても謝ろうとしていません。裁判に訴えているフィリピンの女性たちが言っています。金がほしいのではありません。そうではなくて、ただ一言、政府に謝ってほしいだけなのです。と。私が訪ねた時、女性たちが言いました。あなた、よう来てく

れました。あなたが来てくれたことで、私たちの闘いに希望が見えてきたような気がします、と。最高の言葉です、これは。私は、開口一番、女性たちに答えました。日本の政府があなたたちにとっての態度は、日本人としてはずかしい。ごめんなさい。私にできることは、小さなことかもしれませんが。しかし、日本政府の態度は間違っているということ、私言いたいと思います、と。そう、それだけは、引くわけにはいかないと思います。それこそ、あの女性たちと繋がる道なのですから。

最後に、歴史的理性ということについて補足して、私の話を終わりたいと思います。歴史的理性とは、今、私たちがどんな社会のどんな時代を生かされているのかということ、透徹した目で見抜く力をもたなければだめだ、ということでありませぬ。いかに主体的に歴史に関わって生きようと思っただけで、歴史の狡猾なトリック、つまり「意図せざる結果」を見破る力がなければ、その意志は実践的な力もちえませぬ。ここで権力という言葉を用いますが、権力とは何かという問題はさて置いて、権力が掌握している社会の政治的・文化的な秩序というものが、今どっちに向かって動いているのだろうか、戦争の方だろうか、平和の方だろうか。そのことを

見極めることができないなら、歴史に対して何をなさなければならぬかも、見えてこないはずですよ。

話の末尾に掲げた資料を、ご覧ください。資料の中の文章のあちこちを□印で伏せています。その部分を飛ばすか、□の部分に、例えば「アジア」という言葉を入れて文を読んでみてください。なかなかいい文章でしょう。これは、なんの文章でしょうか。・・・そう、実はこれは、一九四三年に、東条英機が息のかかったアジアの国の政府に呼びかけて開いた「大東亜会議」という会議で出された、「大東亜共同宣言」というものなのです。□印の部分に本当は「大東亜」という言葉が入るのです。また、※印の部分には「米英」という言葉が入ります。そして、もう一度読んでみてください。「大東亜」という言葉は、自由主義史観の人たちもよく用う言葉ですが、私は嫌いな言葉です。というのは、それは、かつて「大日本帝国」が夢見た「大東亜共栄圏」と称するアジア植民地圏の構想に由来する言葉だからであります。ところで、なぜこのような資料をここで引用したかと言いますと、次のようなことがあったからなのです。つまり、あの五四年前の戦争の時、アジアに出ていく軍部のやり方に対して、これでいいのかなとひそかに案じながらも、それに抵抗できない自分に対して良心の呵責を感じていた知識人が

たくさんいました。ところが、政府や軍部が、ある日突然、今次の戦争は欧米列強の帝国主義からアジアの国々を解放するための聖戦、つまり正義の戦争であると言い始めたのです。アジアの国々は、自力で欧米列強を追い出すことができないから、日本がそれを支援しているのだ、と。そこで、これは、ある小説家が当時の日記の中で述懐していたことなのですが、自分はこの戦争はどうもおかしいと思っていただけでも、政府はアジア解放の正義の戦争であるという。なるほど、そうか、それはよかったです、ほっとした、と。つまり、ここで言いたいことは、次のことであります。一九九九年の今、世の中がどっちに向かって動いているのか、戦争の方だろうか、それとも平和の方だろうか。それを見抜く力がなければ、結局、この小説家のような落とし穴に落ちてしまうのだ、ということでもあります。今の世の中にも、マスコミの総動員の中、寛容にみえて非寛容な、平和にみえて戦争の、狡猾きわまりないイデオロギーが氾濫しております。そういう中で、何が真実なのか、何を受け入れて、何を拒絶しなければならぬのか、についての判断力がないとしたら、たちまち権力の狡知に取り込まれてしまうのだ、ということでもあります。

例えば、今、ガイドラインの問題が取りざたされてい

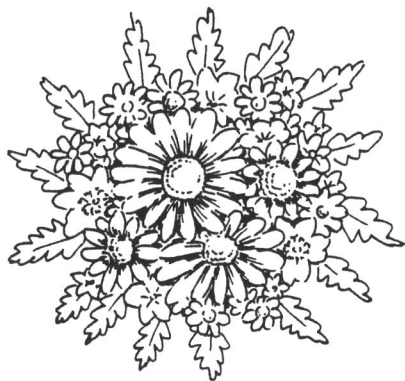
ます。数年前には、PKOやPKFの問題が、大きな話題になりました。その時、次のようなことがもともとらしく喧伝されました。つまり、日本も世界平和のために国連軍に協力しなければならない。経済的な分担といっただきいごとの協力だけでは、もはや日本は世界で成り立っていかないと。その結果、PKOは海外へ出ていきました。ところで皆さん、そもそも、国連ってなんでしょう。私には、国連とは、ソ連が崩壊した今はおさらのこと、超軍事大国であるアメリカを筆頭とした強大国の国際外交の道具としかみえないのです。国連に、小さな国も発言できる形式民主主義さえないとまでは言いません。しかし、実質は、そんなものだと思うのです。しかし、多くの日本国民は、国連を介して世界平和に貢献することはいいことだと思っています。「世界平和」のためならば、日本の自衛隊が海外に出ていくのも仕方ないことだと思っています。つまり、国連とか世界平和という大義名分のもとで、私たちの日本はほとんど戦争の方向に、軍備増強の方に、そういうイデオロギーに取り込まれていっているような気がしてなりません。もし私の杞憂にすぎないのでしたら、それは結構なことなのですが。

ヘルベルト・マルクーゼという哲学者がいますが、彼

が、『一次元的人間』という本を書いています。彼は、その本の中で、現代人というのは一次元的人間になりさがってしまった、ということを行っています。つまり現代の管理社会において、人間は、社会を根底から乗り越えるような思考や感性をことごとく奪われて、社会に飼いや馴らされてしまった。芸術も文学も、思想や哲学でさえ、結局、社会の秩序の枠組みに呑み込まれ、それに対する「批判」さえも呑み込まれて、いつのまにかその枠組みを補強するような、そんなものしか残らなくなった。だから、本当に秩序の枠組みを越えるためには、そのような秩序の中で身につけてきたみずからの思考や感性を疑い、解体し続けることしか残されていない、と言っている。私も、そう思います。自由主義史観を受け入れるような政治状況の底には、実はこのような蟻地獄があるのではないかという不安を、私は感じています。だからこそ、マルクーゼが言うような、徹底した懐疑と批判の精神が必要になるのだと思います。そして、本当の自由と確かな至福の道は、その先にしか見えてこないと思うのです。

自由主義史観についてどう思うのか。そして、それを生み出すような政治状況に何を見るのか。そのような問いを問う中で、私は、現代の人間的状况についてあれ

これ思いを巡らせている、ということでもあります。今日は拙い話を聞いていただきまして、ありがとうございます。



【資料】

□□□共同宣言

そもそも世界各国が各（おのおの）そのところを得、相倚（よ）りて相扶（たす）けて万邦共栄の樂を偕（とも）にするは、世界平和確立の根本要義成り。しかるに※※は自国の繁栄のためには他国家、他民族を抑圧し、特に□□□に対しては飽くなき侵略、搾取を行い、□□□隷属化の野望を逞（たくま）しうし、ついには□□□の安定を根底より覆さんとせり。□□□戦争の原因ここに存す。□□□各国は相提携して□□□戦争を完遂し、□□□を※※の桎梏より解放してその自存自衛を全うし、左の要綱に基づき□□□を建設し、以って世界平和の確立に寄与せんことを期す。

- 一、□□□各国は協同して□□□の安定を確保し、道義に基づく共存共栄の秩序を建設す。
- 一、□□□各国は相互に自主、独立を尊重し、互助敦睦（とんぼく）の実を挙げ、□□□の親和を確立す。
- 一、□□□各国は相互にその伝統を尊重し、各民族の創造性を伸暢（しんちょう）し、□□□の文化を昂揚す。
- 一、□□□各国は互恵の下緊密に提携し、その経済発展を図り、□□□の繁栄を増進す。
- 一、□□□各国は万邦との交誼（こうぎ）を篤（あつ）うし、人種の差別を撤廃し、あまねく文化を交流し、進んで資源を開放し、以って世界の進運に貢献す。